

## 2011 年度講演会

2011 年度講演会の外国語教育研究センター公開講演会は、シドニー大学日本学科准教授 マッツ・カールソン (Dr Mats Karlsson) 氏を講師に迎え、11 月 10 日 (木) 午後 5 時 30 分から中央教育研究棟 405 教室にて開催された。開催に当たっては文学部日本語日本文学科の後援を得た。

マッツ・カールソン氏はスウェーデン出身の日本文学研究者で、ストックホルム大学で博士号を取得、現在オーストラリアで教鞭をとられている。今回の講演では、夏目漱石が約 100 年前に本学で行った講演「私の個人主義」にも触れ、外国語を学ぶには個人の経験に根付いた目的意識が大事だということを、ご自身の経験とともに語って下さった。当日は学外からの参加者もあり、オーストラリアの日本語教育や、またスウェーデンとアメリカとの相違点などにも触れた活発な質疑応答も行われた。

\* \* \*

### 「面白い日本語の私—ストックホルム大学、 シドニー大学からみた日本語教育」

マッツ・カールソン氏  
(シドニー大学日本学科准教授)

十九世紀から二十世紀の初頭にかけて、ヨーロッパの裕福な家庭の若者たちは文化的な刺激を求め教養を身につけるためにヨーロッパの文化的先進地域を長期間旅行した。ルネッサンスの宝庫であるフィレンツェやヴェネツィアは精神的な啓蒙を求めるこういった旅の一番の目的地で、『失われた時を求めて』

で書かれているマルセル・プルーストのイタリアへの臆想は特にイタリアに向けての大きなロマンチックなあこがれを十分に表している。

最近ではこのような旅行は一般の人々にも可能になり、私が大学生だった80年代、スウェーデンでは大学を休学して異国を巡ることは普通のことであり、エキゾチックな東洋の国々は一番の目的地であった。氷点下20度の真冬に、ストックホルムからモスクワへ向かい、中国、インド、さらに東南アジアへと旅をしていたが、低予算での旅は食事注文につけられず、途中で過敏な腹に重大な問題が生じることとなった。そこで旅程を変更し、衛生環境の良い日本へ行くこととなった。今振り返ってみると私が日本を発見したのは、私のデリケートなお腹に感謝するところが大きい。

私が日本に興味を持ったきっかけは文学であったが、私が日本語を勉強し始めた80年代の終り頃は、学科で学ぶ男子学生の多くにとって、柔道や空手など武道が日本語を選択した理由だった。しかし近年は、男子学生が日本語を学び始めるのは、ポップカルチャーが発端になることが殆どのようなのだ。

スウェーデンの大学では、学生は一度に複数の教科ではなく、ひとつの教科を集中的に学んでいく。これにより、学生は短期間で言語を上達することができるが、日本語を本当に駆使するには、やはり日本に長期滞在することが必要である。日本語学習者数が世界で4番目に多いオーストラリアでは、日本語教育はスウェーデンと比べ遥かに大規模であるが、的確な教育技術、特に読み書きを明確に伝えられる教師は少ない。私は現在勤務している大学では主に文法と読解のクラスを受け持っているが、授業中の説明は英語で行っている。英語が不得意な留学生が多く、日本語で授業を進める方が望ましいが、なかなか実践には至らない。

語学を学ぶ人には、はっきりとした目的意識が一番の道具だということをお伝えしたい。外国人の恋人のために学ぶということもあれば、その他様々な理由があると思う。この「目的意識」は夏目漱石が「私の個人主義」で述べた「自己本位」と共通点があるように思う。どちらも自分の才能を信じ、努力を積み重ねることによって目的に辿り着こうという姿勢を表しているためである。夏目は学生に呼び掛ける：「ああここにおれの進むべき道があった！ ようやく掘

り当てた！こういう間投詞を心の底から呼び出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事が出来るのでしょうか。」その「容易に打ち壊されない自信」を強調するのは、国家や家族のためではなく「貴方がた自身の幸福のために、これが絶対に必要じゃないかと思うから申し上げるのです」と。私の日本語を学ぶ理由は、来日前に友人から誕生日に贈られた一冊の本、スウェーデン語に翻訳された川端康成の『千羽鶴』であった。私はこの小説に夢中になり、日本のことは何も知らないが、原文で読みたいと強く感じたのだった。

今回の講演会のタイトルは、1968年に川端康成がノーベル賞受賞講演「美しい日本の私」を参考にしている。また、類似のタイトルの書籍、中島義道の『うるさい日本の私』では、日本には人工的な騒音が多いことが述べられている。私はちりがみ交換のトラックの音声が一番の騒音であると感じているが、何度も同じ放送を聞くことは、文法、語彙の理解につながるため、語学履修者には良い勉強手段ではないかと思う。

能や武道のような伝統文化、漫画やアニメにも関心の低い私は恐らく珍種の親日派であるが、日本の文学に関しては色々と思い巡らせている。例えば村上春樹がノーベル文学賞に推薦されているのは、東洋的異国情緒に対する憧れであり、私はノーベル文学賞はよりシリアスで読むのに少々努力がいるような純文学の作家へ授与されてきた流れを汲むべきと感じている。もし村上春樹がイギリス人かアメリカ人であれば候補にはのぼっていなかったと思う。彼が受賞することになればノーベル文学賞が初めて人気作家に送られたことになり伝統が破られることになると思っている。かつて大江健三郎が同賞を受けた時「彼の文学は難しいですね」というのが挨拶になったようである。そもそも西洋人にとって、日本語は大変難解な言葉だと言われていた頃から時代は変わっている。また、日本人は外国語を学ぶのが苦手と言われているようだが、これは学ぶ姿勢の問題ではないかと思う。バラク・オバマのように「Yes We Can」の姿勢で語学学習に臨み、インターネットを介し音楽、ビデオ、新聞などから外国語に触れ易い今、より可能性を信じて積極的に学んでほしい。